

# 逃げるオタク、恋するリア充

*Yuri & Kouta*

---

桔梗 楓

*Kaede Kikyo*



エタニティ文庫

## 目次

逃げるオタク、恋するリア充

5

書き下ろし番外編

ヒミツの当選

345

逃げるオタク、恋するリア充

## 第一章 メツキが剥がれた日

人は誰しも、多かれ少なかれ己を偽るものではないだろうか。自分の印象をよくするため、円満な人間関係を構築するため——その理由は様々で、ありのままの『素顔』をさらけ出せる人間はごく一部に過ぎないと思う。

私——羽坂由里は、とある事情により素顔を隠している人間の一人だ。

短大を卒業して入社した、中堅の印刷会社。その会社で営業事務として二年弱働いている私は、頭のとっぺんから足の先まで、しっかりと猫を被っていた。

『清楚なお嬢様』という猫を被りはじめたのは短大に入学した頃。その演技にも、今ではすっかり磨きがかかっている。

会社の人間は私の本性など知る由もなく、育ちのよいお嬢様だと思いこんでいるであろう。

——私は、自信を持っていた。これからも、絶対に本性を隠し通せると思っていたのだ。

それなのに、まさかあんなことになるなんて——

思い返すと、その日は朝から不吉な予感があった。テレビで見た『今日の星占い』は最下位だったし、やたらと赤信号に足止めされ、電車も遅延——そのせいでいつもより入社時間が遅くなり、ようやく席に着いたと思ったら、お気に入りのマグカップにヒビが入っていた。

仕事中にも、パソコンの動作が遅く何度もフリーズしたり、私を使う時に限ってコピー機用の紙やトナーが切れたりした。

ついていない日は、さっさと帰ってしまおう。今日は大事な予定もあるのだし……

そう思っていたのに、終業間際、営業の笹塚から発注書をバサバサ渡された。しかも「その処理、今日中な」とか言ってくる。

この笹塚という男は、いわゆるイケメンの部類に入る容姿をお持ちで、シャープな顔立ちに、通った鼻筋、背は高くて一八〇センチはあるだろう。爽やかな笑顔も素敵な、好青年と呼ばれるタイプの人間だ。

こういった、いかにもリア充なオーラがみなぎる人間は、私が最も苦手とする人種なので、あまり関わりたくない。だが、仕事ではそんなことも言っていられない。

突然の残業を言い渡した笹塚に殺意を覚えつつ、死ぬ気でパソコンに向かった。なぜ

なら私は、なんとしても約束の時間までに帰らなければならぬのだ。

高速で発注書を処理し、笹塚にチェックをしてもらった時点で、時計の針は七時二十分を指していた。笹塚は「悪かったな、メシでも奢おごってやるよ」なんて言ってくるけれど、それどころではない。とにかく一刻も早く帰りたいのだ。

表面上では申し訳なさそうにお断りし、営業部のフロアを出て、ロッカールームで制服を着替える。そして会社を出た瞬間、私は秋の肌寒い空の下を全力で走りはじめた。

現在の時刻は、七時半。約束の時間は八時。ここから自宅アパートまでは、最短で四十分。

……絶対に間に合わない。

仕方がないので、駅前のネットカフェに向かつて走った。何度か利用はしたことがあるが、会社から近いいため、同僚に見られる可能性も高い。だからあまり使いたくなかったけど、背に腹は替えられない。

息を切らして入店し、受付の店員に会員カードを差し出す。ここでも、私はついていなかった。個室はすべて埋まっていて、ほぼ仕切りのないオープン席かペアシートのカップル席しか空いていないという。さすがに、カップルシートに一人で座るのは気が引ける。げんなりしながらオープン席を選んだ私は、席に着くや否いなや、あるゲームを起動させた。

そう、私の用事とはコレである。多人数同時参加型のオンラインゲーム。

すごく簡単に説明すると、自分好みのキャラクターを作成して仮想世界を冒険し、仲間パーティーと一緒にモンスターを倒したり、協力して謎を解いたりするゲームだ。

今日は八時に、私が所属しているクランのメンバーで、難度の高いイベントに挑戦しようとしていた。ちなみにクランというのは、仲の良い者同士で作ったグループのようなものこと。もちろん、メンバーは全員ゲームを通じて知り合った人たちである。

IDとパスワードを入力してゲームにログインすると、私以外のメンバーはすでに全員揃そろっていた。私はキーボードを叩いて、チャット画面にメッセージを書きこむ。

『ごめん、待った？』

『エカリナおつかれー。待ったも何も、まだ八時前w 早くも全員揃そろったな』

エカリナというのは、私のキャラクター名だ。メンバーとチャットをしつつ、手持ちのアイテムや装備を確認する。うん、大丈夫だね。あとは消耗品だけ用意すれば、準備万端だ。

『エカリナは残業だったの？』

『そうだよ。営業が定時直前に仕事持ってきてさ。まじ、空気読めって思った』

『エカリナさん大変ですねww おつw』

『本当だよw マジあの営業ハゲるww』

「ほお……悪かったな、空気読まなくて」  
 まったくだよ。そもそも残業前提で仕事を渡してこないでほしい。繁忙期でもないのに、納期が今日中なんて！ 明日の朝イチでいいじゃん。

「あと俺の家系は毛根が丈夫でな。だから禿げない」

ああ、そうですか。じゃあ、もげろ……って、え!?

背後から聞こえてくる低い声には、聞き覚えがある。

恐るおそる振り向いてみれば、そこにはよく見知った……というか、さつき会社で別れたばかりの男がいた。

笹塚浩太。

——本当に、今日の私はついてない。

どうしよう、どうしよう、どうしよう……

その答えが見つからなかった私は、ギギギと音がするほど硬直しながらパソコンに向き直る。

『皆、用意すんだ？ そろそろ行くよー』

『あああ！ 待ってもうちよ！』

思わず高速でキーボードを叩き、消耗品の準備をしていると、再び背後から低い声が聞こえてくる。

「羽坂さあ」

背中を冷たい汗が伝っていく。

「趣味は、編み物とお菓子作りじゃなかったっけ？」

ぎくう！

脳内に浮かんだ選択肢は三つ。一、ガン無視する。二、『羽坂さんって誰ですか？』と誤魔化す。三、脅……いや、口封じする。

テンパっていた私は、どういうわけだか二を選んでしまった。

「羽坂さんって誰ですか？ オホホ——」

「いや、お前だよ。うちの営業事務で、さつきまで一緒に残業してただろ」

「た、他人の空似でございませう。羽坂さんなんてグレイトチャーミングな人、まったく知りません」

「自分のことをグレイトチャーミングなんて言う女、はじめて見たよ。何はともあれ、お前は羽坂だ。信じたくなえけど」

そう言って笹塚は、私の座る回転椅子をくると回して自分に向けた。

うう……仕方がない。かくなる上は、次の選択肢——その三！

私はピースサインを作ると、笹塚の目に向かって指を突き出した。

「とりゃああ！」

「なんだ!？」

「口封じ! 目潰しだ! その目を潰してくれろ!」

「はあ? 口封じなのに目潰しって……っていかお前、それが『素』なんだな?」  
ぎくう!!

私は無言で椅子を回し、パソコンに顔を向けた。

……やっぱり、選択肢その一だ。ガン無視しよう。それがいい。最初からそうすればよかった。

『準備できた。遅れてごめん!』

『いいよ。このイベント、失敗したらまたアイテム集めからしなきゃいけないし、頑張ろうね』

そうそう。このイベントはとにかく準備が面倒なんだよ。絶対に失敗できない。

「羽坂!」

だから無視だ。私には、こんな男を相手にしている暇などない。消耗品は、ちゃんと揃えた。アイテムも装備も問題なし。攻略サイトを見て事前に予習もしたから、準備万端。

「羽坂由里ちゃん」

ちゃん付けするな! ……いや、ここは無視無視。このまま相手にしなければ、笹塚

も諦めてどこかに行くはず——

「おー、園部? 今さあ、ネカフエなんだけど。なんか羽坂が——」

園部って、営業部の園部さん!?

「ちょっと待って!!」

超高速で椅子を回して立ち上がる。しかしヤツは、携帯電話など持っていないかった。しまった、はめられた!

笹塚は悪人みたいな笑みを浮かべる。

「やつと反応したな? 羽坂」

「くっ、いくらですか!」

「は?」

「いくらなら手を打ちますか!?! 今は月末でお金がないけど、来月なら、ごっ、五千円くらいなら」

「安すぎだろ、それ。別に金なんていらねえよ。……それより、場所を変えないか?」

笹塚はにっこりと笑って、入り口近くの受付に親指を向けた。

「ペアシートのあるカップル席に移動しよう。そっちで話をしたい」

「は、話すことなんてありません。お願いですから、私のことは放っておいて………ひえっ!」

オープン席のテーブルに、すっと手が置かれた。今まで仕事のやりとりしかしてこなかった笹塚が、いきなり至近距離まで近づいてくる。

ち、近すぎますよ!? 笹塚さん!

彼は今まで聞いたこともないくらい意地悪な声色で囁いてくる。

「今日のこと、ばらされたくないだろう? 『お嬢様』の羽坂さん」

耳に笹塚の息がかかり、肩が震える。耳の奥がぞくりとする低い声に、背中を冷や汗が伝った。

笹塚に弱みを握られた以上、私に拒否権はない。仕方なくゲームのパーティメンバーに一度断ってログアウトした後、店員に席移動の処理をしてもらう。そうしてカップル席に座ったのだけれど――

ペアシートは思いのほか狭く、密着度が無駄に高かった。笹塚からはお洒落感満載の香りがほのかに漂ってくるし、腕も当たって妙に意識してしまう。なんだ、この状況。

チャリと隣を見れば、笹塚が興味深そうにパソコンのモニターを見つめている。

移動する際、ゲームを続けても構わないと言われたので、お言葉に甘えることにした。しかしこの状況、はつきり言って非常に恥ずかしい。これはいわゆる羞恥プレイってやつだろうか。

とにかく現実から逃避したくて、私はゲームに集中した。

一方の笹塚は食事のメニューに目を向けて、電話の受話器を手取る。

「あ、注文お願いします。チャーハンとオムライス一つずつ。羽坂、何か食う?」

「……ケッコウです」

「ああ、あとたこ焼き一つ、追加ください」

どうでもいいけど、チャーハンとオムライスにたこ焼き? よく食べる男だな。

「飲み物取ってくる。羽坂も、なんか飲む?」

「……メロンソーダ」

すると笹塚は「メロンソーダ!」と言って笑い出した。……さつきから失礼極まりない。

「好きな飲み物はアールグレイの紅茶じゃなかったのか?」

笹塚のツッコみに、私はハツとして答える。

「……っ! じゃ、じゃあ、紅茶でいいです」

「今さらだろ。メロンソーダだな」

クツクツと笑いながら、笹塚は飲み物を取りに席を立つ。くそう、なんで出入り口のドアに鍵が付いてないんだ! もしくは板と釘と金槌があったら、絶対ヤツを締め出すのに……

それにしても、どんどんメッキが剥がれていく。笹塚の言葉じゃないけど、メロン



ソーダは失敗だったよね。せめてお茶って言えばよかった。

私がかさくさしている間にも、ゲーム内ではイベントが進んでいく。

……やがてモニターの中に、巨大な敵が現れた。これを倒さなければ、イベントは終わらない。

すぐドキドキする。皆で強敵に挑むこの一瞬がとても好きだ。それに、勝利した時の達成感も堪らない。現実では、手に入らない感情だ。

ワクワクしながらキャラクターを操作していると、目の前にたこ焼きが現れた。

「食う?」

……空気ぶち壊し野郎め。

私は、無言でばかりとたこ焼きを食べた。……美味しい。夕飯を食べてないので、なおさら美味しく感じる。でも今の私は、たこ焼き食べてる場合じゃないんだよ！ 強敵が目前にいるんだよ！

「ちよつと今から集中します。邪魔しないでください」

「はいはい。あ、メロンソーダここ置いとくぞ?」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

すぐ傍から、くすくすと笑い声が聞こえる。くそう、本当に面白がってるよね。覚え

てろ、後で絶対に話し合いたい！

——戦闘がはじまる。私は黙々とキャラクターを操作して、攻撃を繰り返していく。

「おお、すげえ。よく指が動くな。それに、その超真剣な顔。会社じゃ見たことねえな」

……ほつとけ！ オンラインゲームは遊びじゃないんです！

「いや、そういえば、今日の残業中はずげー必死だったか。眉間に皺寄せて、キーボード叩いてたもんな」

当たり前だ。私にとつては、リアルよりゲームの約束が大事なんだから！

内心ピリピリしつつもキャラクターをいつも通り動かし、仲間たちと協力して、敵を追いつめていく。

しばらくして、戦闘は終了した。崩れ落ちるモンスター。もちろん、我々の勝利である。いつもなら『よし!』とか言ってガッツポーズをするところだけど、今はとてもそんな気分になれない。

はーとため息をついて隣を見たら、笹塚がニヤニヤしていた。殺意よ、こんにちは。

「お疲れ。夕飯、食わねえの?」

「……後で食べます。それで、どうして笹塚……さんが、ここにいますか?」

なんだか今さらな気もするが、私は眉間に皺を寄せつつ笹塚に尋ねる。

「そりゃあ、清楚せいそなお嬢様キャラの羽坂さんがネットカフェでオンラインゲームしてて、しかもいつもと全然違う言葉遣いでチャットしてたら気になるだろ？ 普通」  
 ぐっと私の顔が歪ゆがむ。確かに、私は会社で『清楚せいそなお嬢様』スタイルを貫つらぬいている。盛大に猫を被かっているのだ。

「趣味は、編み物とお菓子作りだったよな。これは、嘘？」

「……はい」

ただし、編み物には挑戦したことがある。マフラーという名のボロキレが完成し、以  
 来やっていないだけだ。……お菓子作りは、そもそも料理ができないので真まつ赤な嘘で  
 ある。

「じゃあ去年のバレンタインデーで配くばった手作りチョコクッキーは、なんだったん  
 だよ」

「あれは近所のケーキ屋で売ってる手作りチョコクッキーを包装しなおしたものです」

「お前……手が込んでるっていうか、それは詐欺さぎの域いもだぞ……」

うるさいな、バレなきゃ問題ないでしょう。……今、バレたけど。

「好きな飲み物はアールグレイの紅茶。好きな食べ物はなんだっけ？」

「さ、最近パンケーキにはまっています」

無駄かもしれないけど、目を逸そらしつつ取り繕つくろう。すると笹塚ささづかは、鋭すどくツツコンで

きた。

「それも嘘うそだろ。本当は？」

「……特にありません、なんでも好きです。強しいて言うなら、コンビニ惣菜そうざいが手軽で味  
 もいいと思います」

はあ、とため息をつかれた。落胆らくたんというより、呆あれてモノが言えないという感じだ。

普段は適当な惣菜そうざいを夕飯にして缶チューハイを飲んでるんです、とか言ったら怒り出す  
 かもしれない。

「じゃあ、いいところのお嬢様っていうのも嘘なのか。確か親が社長とか言ってた  
 か？」

「社長ですよ。米農家ですけど」

またため息をつかれた。何よ、その馬鹿にした表情——米農家をなめんなよ、日本  
 人の主食を作ってるんだから！

「……お前、嘘が多すぎだろう。バレたらどうするつもりだったんだ？」

「バレない自信はありました」

「今まさにバレてるけどな、俺に。……なんでそんなに嘘をついてるんだ？」

「……じゃあ、逆に聞きますけど。趣味はゲームで、休みの日もネットばかりしている  
 根暗な女なんですって会社でカミングアウトする奴と、仲良くなりたいって思います

か？」

私の問いかけに、笹塚が黙りこむ。

「普通、引きますよね？ 男の人なら、中には引かない人だっているかもしれないんですけど……問題は女性なんです。普通の女性は、根暗なゲーマーと仲良くなりたくないなんて思わないんですよ。遠巻きにされたり、冷たくされたり、最悪イジメられます。それなら最初から嘘をついて猫被ってるほうが気楽なんです。どうせ会社だけの付き合いなんですから」

誰でも趣味は持っているものだ。なのに、なぜかゲームやアニメが好きだとドン引きされる。特に洒落で華やかで集団行動の好きな女性は、『気持ち悪い』と眉をひそめることが多い。……全員がそうだとは言わないけれど。

だからこそ私は、普段、ゲーマーで根暗な自分を隠しているのだ。

清楚ぶって育ちのよいお嬢様を演じていれば、男女関係なく円満な人間関係を構築できる。趣味も無難なものにしてあげばいい。私を理解してくれる友達はいるから、会社の人間にまでそれを求めない。そのほうが断然楽だから。

それなのに、まさか同じ会社の人間にバレてしまうなんて——  
チラリと笹塚をうかがえば、奴は納得したような表情で頷いた。

「……なるほどな。お前の嘘は、いわゆる処世術ってやつか」

「そうです。理解してもらえて光栄です。……それで、どうするんですか？ 皆にバラすんですか？」

「バラさねえよ。そんなことしたってなんの得にもならねえだろ」

「……そうですか。私の本性に引きつつも黙っていてくれるなんて、笹塚さんは優しい人ですね」

あははーと乾いた声で笑ってやる。半分以上は嫌味だ。そもそも奴がネットカフェに來なければこんな事態にならなかったのだ。本当にどうして來たんだよ。一体、なんの用があったの？

眉間に皺を寄せていると、笹塚が少しつまらなさそうな表情を浮かべる。

「別に引いてねえよ」

「そうですか」

「信じてねえだろ」

「別に。引いてないって言っても、内心ドン引きしてる人はよく見てきましたから」

「色々とひん曲がってる奴だなー。引くわけねえだろ。だって俺もそのゲーム、やってるし」

……は？

私は多分、呆けた顔をしたのだろう。笹塚はニヤリと笑うと、目でモニターを示した。

「『ヘイムダルサーガ』だろ？俺もやってんだよ」

「え、ええーっ!？」

驚愕きょうがくの声が出る。仕方ないだろう。笹塚がオンラインゲームをやっているなんて意外すぎる。しかも、私と同じゲームとは……

私の反応に、奴は満足そうに笑って顔を近づけてくる。そして――

「ひえっ!？」

「安心しろよ。誰にもバラさないから。二人だけの秘密な？」

……いきなり耳元みみもとで囁ささやくな！びっくりするじゃないか、リア充野郎め！

## 第二章 秘密の関係

翌日――出社して制服に着替えた私は、ロッカールームの鏡で自分の姿を念入りに確認していた。

丁寧ていねいにブローしたセミロングの髪、ファッション誌で研究した清潔感のあるメイク、爪に薄く塗った珊瑚色さんごいろのネイル。

ちなみに、このヘアセットとメイクは一時間かかるので、非常に面倒くさい。しかし、その甲斐かひあって私の『お嬢様スタイル』は今日も完璧だ。あとは丁寧な口調で微笑みを絶たやさずに過たごせば問題なし。

「羽坂さんおはよう」

始業十五分前、わらわらと女子社員たちがロッカールームに入ってくる。私はにこやかに微笑あひまわんで挨拶を交わした。

「おはようございます」

「そういえば、聞いた？年明けにまたスノボ旅行やるらしいよ」

「あ、聞いた聞いた！前に営業部で企画したのが好評だったんでしょ？今回は総務

部も行くみたい」

「え、じゃあ高島さんも行くのかな？ それだったら私も行きたい！」

高島さんとは、総務部所属のイケメンだ。女子社員の間で、結構人気があるらしい。

……それはさておき、朝から本当に賑やかだ。パタンとロッカーの扉を閉め、鍵をかけていると、話を振られてしまった。

「羽坂さんは参加するの？」

「うーん、どうしようかな。私、スポーツ苦手だから……ちよつと悩み中なんですよね」

困ったように笑って、軽く首を傾げる。あくまでお嬢様っぽく、清楚さを忘れない。私のようなメッキ女は、いつボロが出るかもわからないから、常に注意を払う必要がある。

ちなみにスポーツが苦手なのは本当だ。むしろ嫌いの部類に入る。正直なところ、スノボなんぞに行く暇があるなら、レアモンスターを狩るべく日がな一日パソコンに向かっていたい。

「あはは、確かに羽坂さんってスポーツは苦手そう〜」

「そうなんですよ。参加しても、麓の施設で待機することになっちゃいます」

「それじゃ行く意味がないよ。そうだ、教えてもらいなよ。結構、面倒見のいい人い

るよ？ 営業部だと……笹塚さんとか？」

笹塚——その名前を聞いて、私の鉄壁スマイルが一瞬引きつった。

「そういうえば、笹塚さんは面倒見がよかったよね。スノボがはじめてな人にも丁寧に指導してくれて」

「うんうん。前回、水沢さんも教えてもらってたよね？」

「はい。教え方がとても丁寧でしたよ。運動が苦手な私でも、ちよつとは滑れるようになりますし……」

水沢さんはそう言って、頬をうつすらと染めた。メッキな私と違って、彼女は本当にお嬢様然としている。きつと、自分を偽る必要なんてないんだろうな……羨ましい限りだ。

「良かったねえ。笹塚さんって、スノボの他にもサーフィンが得意なんだって。見てみたいよねー。来年の夏にも、何か企画してくれないかなー」

……スノボにサーフィン。本当、私からは最も遠い人種だな、笹塚。そんな奴が、オンラインゲームをやっているなんて——やっぱり信じられない。

私は、昨晚のことを思い出す。

『安心しろよ。誰にもバラさないから。二人だけの秘密な？』

耳元でそう囁かれた後、私は動揺を隠すべく、奴のゲームキャラクターを見てみたい

とせがんでみた。しかしIDとパスワードを覚えていないと言われ、会話は終了。その後、ネットカフェを出た私たちは、夕飯を一緒に食べてから解散した。

笹塚は「残業のお礼に」とトンカツ定食を奢<sup>おご</sup>ってくれたのだが、奴も同じ定食を食べていた。ネットカフェでもあれだけ食べていたというのに……どれだけ食べるんだ。びっくりしたよ。

他の女子社員たちと一緒にロッカールームを出て、事務所に移動する。こうしてできるだけ集団行動を取ることも、処世術<sup>しよせいじゆつ</sup>の一つなのだ。

やがて始業時刻となり、朝礼がはじまる。恒例のラジオ体操をしながら、私はちらりと後ろを見た。

そこには、眠たげな顔でダルそうに体操している笹塚の姿。

ナチュラルに後ろへ流した髪、涼しげな目元、シャープな輪郭<sup>りんかく</sup>、高い鼻梁<sup>びりやう</sup>。

……やっぱり、見た目はイケメンだ。加えて背が高く、体格もいい。

噂によると、週に一回、営業部の仲の良いメンバーでフットサルをしているのだとか。夏はサーフィン、冬はスノボ、おまけに毎週フットサル……絵に描いたようなリア充ぶりである。

奴に私の秘密がバレてしまったのは痛い。どこかでポロリとバラされてしまったらどうしようかと不安に駆られるが、同時に、笹塚はそんなことをしないのでは……という妙に接してきた。

私は気持ちを切り替えるために何度か首を振り、体操に集中する。そして朝礼を終え、今日の業務に取りかかったのだった。

——終業後、私はイライラしながらネットカフェの前に立っていた。

なぜかという、今日の夕方、ある付箋<sup>ふせん</sup>の貼られた発注書を受け取ったからだ。付箋<sup>ふせん</sup>に書かれていたのは、『十九時、昨日のネットカフェ前』というメッセージ。もちろん、これを渡してきたのは笹塚である。

我が社の終業時刻は十七時半なので、待ち合わせまでは一時間半もある。秋も深まった夜はさすがに寒く、外で待つのは苦行すぎると、近くのカフェで時間を潰した。……ものすごく暇だった。そんな時間があるなら、ゲームをしていたい。

そして十九時を過ぎた今、私はこうしてネットカフェの前で奴を待っているのだが——

笹塚はなかなかやってこない。

「とうか寒い。付箋なんて見なかったことにしてさっさと帰ればよかった！ そもそも、どうして私は一時間半も奴のことを待っているんだ!!」

……いや、私は怯えているんだ。

根暗なゲーマーであることがバレってしまったから。この約束をすっぱかすことで、筐体に手のひらを返されないう恐れているんだ。

つまり弱み！ 弱みを握られているも同然！ なんとということだ！

「おー、羽坂。待たせてすまん。ミーティングが——」

私はようやく現れた笹塚に、勢いよく詰め寄る。

「後生だ、笹塚さん！ なんとか六千円で手を打ってください！ 来月、必ず払うから！」

「はあ？ だから金なんていらねえって何度も——」

「クッ、金じゃなびかないか！ じゃあお米！ うちのお米をあげるから、昨日のことはすっぱり忘れて、私のことは放っておいてください！ バラさないでください！ お願ひします頼みます！」

私の必死の懇願に、なぜか笹塚はものすごく不満げな顔をした。

「金も米もいらなし、バラさねえって言ってるだろ。信じるよ」

「うう、じゃあどうしてこんなふうに呼び出したんですか？ 一時間半も待たせて……」

その上、お米もいらなしか……うちのお米はすごいんですよ！ お米への価値観が変わること間違いなしなのに！」

「コメコメうるさいな。待たせたのは悪かったよ。週一のミーティングが長引いてな。

あと、呼び出した理由はコレだよ」

そう言っって笹塚がポケットから取り出したのは、IDとパスワードの書かれたメモ用紙。

……そういえば、昨日、キャラクターを見せてってせがんだんだっけ。

「わざわざ見せてくれるんですか？ 律儀ですね……」

「まあ、お前ほどレベルは上げてねえけどな」

「私のキャラクターレベルはなんと……魔人の域なんで」

「なんでそこで照れ顔なんだよ」

べしっと頭にチョップされた。軽く痛い！ 今のはツッコミか！

「先にキャラクター見せてもいいけど、ネカフェはろくな食い物ないし、先に何か食いに行こうぜ」

「私はネカフェのカップ麺でいいです。月末だからお金がないんです」

「奢ってやるよ」

ななな、なんとというブルジョア発言。私もかるーく『奢ってやるよ』なんて言っって不

敵に笑ってみたい。でも現実まじは厳しい。今の私は、悲しいかなお金がない。

「いいんですか？ 笹塚さん、ありがとうございます！ 嬉しいですよ！」

「……その『お嬢様面』やめろよ。素すを知った後で会社のお前見ると、鳥肌立って仕方なかったぞ」

「失礼ですね。笹塚さん、私、焼肉食べたいです」

「俺は焼き鳥が食いたい。だから居酒屋」

そう言って、笹塚はスタスタと歩きはじめる。奴の足は長く、歩幅も広い。私は小走りこ走りで笹塚を追いかけた。

居酒屋でとりあえずビールを注文するのは、サラリーマンのお約束なのだろうか。

私は小ジョッキ、奴は中ジョッキで乾杯する。「お疲れ」と言い合ってジョッキをかちんと合わせ、ぐびぐび飲んだ。美味しい。

笹塚はジョッキの半分以上を一気に飲むと、メニューを広げて私に向けてくる。

「何食う？」

「鶏とりなんこつとタコワサをお願いします」

即答すると、笹塚が肩を震わせて笑う。昨日から笑われてばかりだ。どうせ『会社の飲み会ではシーザーサラダとか頼むくせに』とか思っているんだろう。その通りだよ。

会社の飲み会でタコワサなんか頼めるわけないでしょ！

眉根を寄せる私に、笹塚は笑いを堪こらえながら声をかける。

「すまん。別に悪い意味で笑ったんじゃないやなくてな」

「……悪い意味以外に、どんな意味があるっていうんですか？」

「うーん、なんていうか——羽坂は面白いヤツだなあって」

「面白いは褒め言葉じゃありませんからね。お嬢様面ぶらするなって言うから、普通にしているのに……それで笑うんなら、会社の対応で行きます」

「悪い悪い、もう笑わねえよ。だから敬語もやめて普通に話してくれ。あの会社での喋しゃべり方は寒気がする」

寒気って……本当に失礼な奴だな！

笹塚は店員を呼んで、鶏とりなんこつとタコワサ、焼き鳥の盛り合わせ、ししゃも焼きとオムそばを頼んだ。……本当によく食べるよね。

やがて料理がテーブルに並び、笹塚はビールをおかわりする。私はレモンサワーを注文した。

「それで、羽坂。いつからやってるんだ？ そのお育ちのよいお嬢様面ぶら」

「……短大の頃から」

なんでこんな身の上話をしているんだろう。それも、昨日はじめてまともに話したよ



うな笹塚に。

口を尖らせる私に、笹塚は続けて尋ねてくる。

「ふうん。理由、聞いてもいいか？ 趣味を隠したいのはわかるけどさ、なんでお嬢様面をする必要があるんだ？」

「別に、笹塚さんには関係ないでしょう？」

「俺は自分を偽ったことがないから気になるんだよ。なんでそんなことするのかなんて」

「……色々とおふかーいくらいさ事情があるんですよ。リア充の笹塚さんは、一生おわりにならないかもしれないけど。あとは黙秘です」

私の言葉に、笹塚が眉をひそめた。そんな顔しても絶対に話さないぞ。そこまで話す必要性はまったくないし、話したところで面白くともなるともない。

その後は当たり前障りのない話をして食事し、居酒屋を出た。

そして改めて、笹塚とともにネットカフェへ向かう。その道すがら、笹塚の話聞いた。

彼は、二十二歳である私より五歳年上の二十七歳。割と有名な大学出身で、スポーツが趣味。学生時代にはアウトドアサークルに入っていたそう、夏にはツーリングやサーフィン、冬はスノボと年中出かけていたらしい。

「そういやさ、次回のスノボは羽坂も行くのか？ 前回は行かなかっただろ」

「うん。この前の冬は、ダウンケルでの活動が忙しかったから。スノボに行くかはまだ考え中」

「は？ ダウンケル……？」

「ダウンケルエリア、知らないの？ 『ヘイムタルサーガ』のエリアの一つだよ。時間制限つきだけど、レア装備が狙えるんだ。去年はそれが欲しくて、休みの日はずっと家にこもってたの」

「なるほど。で、その装備は取れたのか？」

「もちろん！ 頭から足装備までフルコンプした！」

「ふはは」と笑えば、笹塚が疲れた表情を浮かべる。

そして二人一緒に昨日のネットカフェに入り、再びカッブル席を選んだ。……この席、ペアシートが狭くてあんまり好きじゃないんだけどな。

「ねえ、やっぱりオープン席にしようよ。隣同士にしてさ」

「隣同士で取れる席がねえ。行くぞ」

ええっ、どれだけ人気があるんだ、このネットカフェ。駅前だから仕方ないのかな。

カッブル席のペアシートに座ると、今日は笹塚がゲームを立ち上げた。そしてIDとパスワードを入力し、ログインする。

ぱっと現れた笹塚のキャラクター画面。それを見て私はビックリした。

「えっ、これ？」

「うん」

「レベル7じゃない！ え、セカンドキャラじゃなくて、メインでそれなの？」

「お前が何を言っているのか、俺にはさっぱりわからん。しかし、育てているのはこのキャラだ」

笹塚のキャラクターは、育てているという言葉を使うのはどうかと思うほど弱かった。私なら、一時間もあればレベルを10くらい上げられるというのに……

私は笹塚に許可を取り、装備やアイテムなどを確認させてもらった。すると装備は初期設定のままで、アイテムボックスもスツカラカンだった。

「……笹塚さん、初心者？ このゲーム、いつからやってるの？」

「うーん、一ヶ月くらいかな」

「えっ、一ヶ月!? そんなに時間かけて、どうしてまだレベル7なの!? 何やってたの!？」

「何やってたって……とりあえず街中を歩き回ったな。その後、外に出て適当な敵を殴ってみたらずげえ強くて瞬殺されてさ。仕方ないから街に近いうところで弱そうな敵を倒してた」

私は頭を抱える。笹塚の行動は、どう考えても――

「……ねえ、笹塚さん。もしかして、超初心者なの？ 他のオンラインゲームはしたことない？」

「おう。このゲームがはじめてだよ」

笹塚の言葉に、私は啞然とした。よりによつてはじめてのオンラインゲームが『ハイムダルサーガ』だなんて！ このゲーム、最初の一週間こそ無料だけど、その後は課金しなくちゃいけない玄人向けのゲームなのに！

「どうしてわざわざこのゲームを選んだの？」

「ああ、いや……友達がさ、面白いって誘ってきたんだ」

笹塚は、妙に歯切れ悪く答える。

「ふうん。その友達とは、一緒にゲームをしないの？」

「……お前と同じ感じで、やりこんでる奴だからな。ゲーム上では、会えずじまいだ」

なんとという放置プレイ！ せめて装備を買おうお金くらいあげたらいいのに！ 友達でしょ!？」

「それは……大変っていうか、可哀想っていうか……つままないでしょ？」

「つまらんというか、何が面白いのかよくわからんな。敵を倒したら虫の石つてアイテムをもらえるだろ？ でもそれで鞆が一杯になっていくんだよ。最近捨てるようにし

てる」

「もつたない！ その虫の石はクエストアイテムなの！ 五つ集めると、お金をもらえらんだよ！」

初心者にとって、一番手軽にお金を貯められる方法なのに、そんなことも知らないなんて……

「そうなのか」とのんびり頷く笹塚を、私は同情の目で見てしまった。

うう、むくむくと湧き上がるこの気持ち。

……放っておけない。

何が面白いかわからないのなら、教えてあげたい。一緒に冒険する楽しみを伝えたい。それは、オンラインゲームをやりこんでいる人特有の感情なのかもしれない。上級者があるこれ世話を焼くと初心者ゆえの楽しみを奪ってしまう、と言う人もいる。ただ、笹塚は明らかにこのゲームを面白いと思っていない。課金したから、仕方なくやってる感じがする。

……それなら、ちょっとだけ。ほんの少し手助けするだけ。それでこのゲームを『楽しい』と思ってくれたら——

「あの、さ。あの……」

「ん、なんだ？」

あれ、どうしたんだろう。なんでこんなに緊張してるの、私！ 言葉がうまく出てこない。ネットなら、ゲームなら、『手伝おうか？』って簡単にメッセージを送れるのに。

戸惑ったところで、ハッと思い至る。——そっか。私、現実世界でこんなことを言うのははじめてなんだ。

黙りこんでいると、笹塚は不思議そうに顔を覗きこんできた。うう、余計言いつらい。でも、意を決して口を開いた。

「てて、て、手伝おう……か？」

「手伝う？」

「そ、その……何が面白いのかわからないなら、お、教えようか？ 余計なお世話じゃないなら」

「……へえ？ 羽坂が教えてくれるのか？」

器用に片方の眉を上げて、笹塚が聞いてくる。私はこくりと頷いた。なんだか体が熱い。このネットカフェ、暖房が効きすぎているのかもしれない。

「教えてくれるなら、ありがたいな。正直、途方に暮れてたし」

「このゲームさ、初心者には優しくなくて有名なんだよ」

「なるほどなあ。つつても、どうやって教えてくれるんだ？」

「帰宅後に、お互い家からログインしよう。それでフレンド登録すれば、一緒に遊べる

し。夜は大体ログインしてるから、私のほうはいつでも大丈夫。笹塚さんの都合がいい時に、ログインしたら声かけて」

「それって、毎晩でもいいの？ 今夜も？」

意外なほどやる気な笹塚の反応に、私はちよつと驚く。

「……いいけど」

「わかった。——ついでだし、携帯の番号も交換しないか？ 連絡しやすいほうが便利だろ」

それもそうか。

私と笹塚は、携帯の番号を教え合って解散した。

笹塚、妙に嬉しそうだったけど——気のせいかな？

一方の私は、秘密を共有した仲みたいに思えて、ちよつと恥ずかしかった。

笹塚と別れた後、電車に揺られ、ようやくアパートに辿り着いた。

私はさっそくコタツに置いていたパソコンを起動し、ゲームにログインする。

私のキャラクター・エカリナは、レベル85である。笹塚のレベルに合わせて敵と戦えば、一撃で倒してしまうだろう。そんなキャラクターと一緒に遊んでも、笹塚は楽しくないに違いない。

だから私は、新たなキャラクターを作成することにした。性別はエカリナ同様、女にする。キャラクター名をどうしようか少し悩んだが、笹塚が見てもわかりやすいよう『ユリネ』にした。

キャラクター作成後、ようやく鞆かばんやコートを仕舞い、スマートフォンをコタツの端に置いて半纏はんてんを着る。そして、手前にノートパソコンを引き寄せた。

新しいキャラクターでログインした私は、さっそく友人にチャット機能でメッセージを送る。

『ゆーま君、エカリナです』

『おつす。エカちゃん新しいキャラクター作ったの？』

『うん。初心者さんと遊ぶんだ。しばらく、顔出せないと思う』

『了解。メンバーにも言っとくよ。初心者さんよろしくね』

ありがとうと返して少し世間話をしていると、スマートフォンが鳴る。笹塚からだった。

『ログインした』

メールには、件名もなく必要事項しか書かれていない。短ななつ！ まあそんなものかと思いつつ、私もぼちぼちとメールを返す。

『ちよつと待ってて。ユリネってキャラクターで向かうから』

友人にも『またね』とメッセージを送った後、私はユリネを操作して街をウロウロする。程なくして、笹塚のキヤラクターが見つかった。

私はゲームのチャット機能を使って、笹塚にメッセージを送る。

『お待たせー』

『よろしくな、先生』

先生と呼ばれて気をよくした私は、笹塚と一緒にさっそく街の外に出かけた。

ちなみに、笹塚のキヤラクターはなぜか女の子である。名前はコッコ。本名がコウタだから、女の子風に子をつけてコッコにしたらしい。

……それにしても、コッコちゃんはすごく可愛い。現実世界でも女である私が作ったキヤラクターより可愛いって、どういうことだろう？

『ユリ』

笹塚からのメッセージに、私は眉をひそめる。

『何？ ユリじゃなくて、ユリネだってば』

『略してユリでいいだろ。なんでキヤラ変えたんだ？ エカリナってキヤラは？』

『あれは育ちすぎだから。そんなのと遊んでも面白くないでしょ？』

街の外には野原が広がっていて、モンスターがあちこちでフラフラしている。私は説明を交えつつ、コッコちゃんと一緒に敵を倒して回った。

気がつくと、時計の針は深夜零時を指していた。お互いレベル9になったところで、街に戻って解散する。『またね』と言う笹塚に、私は『またね』と返した。

ゲームをログアウトしてシャワーを浴び、歯を磨いて布団に潜りこむ。そして寝るまでの間、私は今後のことを考えた。

レベル10を超えた頃には、簡単なイベントに挑戦できるかも。そのうち、仲のいい他のメンバーにも紹介したいなあ。あと、簡単にお金を入手できる方法を教えておかないと。馬に乗れるようになったら、あちこち冒険して……そうだ、海の見える街に行こう。あのあたりの敵は、レベルを上げるのに丁度いい。

そこまで考えて、私はふと我に返った。自分がとてもワクワクしていることに気がついたのだ。どうしてだろう？

その答えは出ないまま、私は睡魔に身を任せただった。



私が勤めている印刷会社の営業部には、三人の営業事務がいる。新婚ほやほやの横山三咲主任、水沢愛莉さん、そして私の三人だ。

事務所には営業部、製造部、総務部があり、隣接する印刷工場には技術部がある。

女性事務員は営業事務もあわせて八人。会社全体の雑務は、ローテーションを組んで行っている。来客対応や給湯室の片づけ、毎朝のフロア掃除にゴミ出し、出前注文を兼ねた昼当番、その他にも色々ある。

本日の私の担当は、昼当番。

朝九時半までに出前希望者から注文を取り、十一時半頃に出前の電話をしなければならぬ。

今日の出前希望者は——製造部の宗方むなかたさんが天ぶらうどん、総務部の高嶋さんが親子井、稚名部長がたぬきそば。あ、珍しい、社長も出前だ。天ぶら井、特上って……さすが社長。あとは営業部の園部さんが南蛮なんばんそばで——笹塚はカツ井か。今は外回りしてると思うけど、昼には帰ってくるのかな？

——笹塚とゲームをするようになってから約一週間。私たちは平日の夜、欠かさず一緒にゲームをしている。笹塚がログインする時間は、だいたい夜の九時頃。それから二、三時間ほどレベル上げをしたりクエストをしたりして遊ぶ。

気がつくと私は、夜の九時が近づくとう事を終わらせ、笹塚を待つようになっていた。普段の私はオタクであることを隠しているし、笹塚も自分がオンラインゲームをやっていることを公おおびにするつもりはないらしい。そのため会社での私たちは、あくまで仕事の話しかしない。でも、夜になると友人のように二人で遊ぶ。

そんな関係がなんだかこそばゆいし、不思議だ。こんな気持ちは、はじめてだった。

——正午を知らせるチャイムが鳴る。

仕事をしていった人たちはきりのいいところで席を立ち、ぞろぞろと休憩フロアに向かっていた。

「今日の昼当番は誰だっけ？」

「あ、私です」

「羽坂さんか。じゃあ、あとはよろしくねー」

横山主任はそう言ってひらひら手を振ると、水沢さんと一緒に事務所を出ていった。昼当番のもう一つの役割は、休憩時間中、事務所で待機すること。急な来客や電話応対をするためだ。その後、一時から二時が休憩時間になる。

お腹減ったなあ……私は、ぐうぐう鳴るお腹を押さえた。

黙々と仕事を進めていると、事務所のドアがカチャリと開いて水沢さんが帰ってくる。時計を見ると、まだ十二時三十分だ。

「お帰りなさい、水沢さん。早いですね？」

「休憩フロアがいっぱいになっちゃって。こっちでゆつくりしようと思ったんです」

困ったように笑うと、水沢さんは自分の席に着いて鞆かばんから本を取り出す。

「そうだ、羽坂さん。はい、チョコレート。お腹すいたでしょ？」

「わあ！　ありがとうございます。いただきますね」

わざとらしくない程度に喜んで、チョコレートを受け取る。いや、実際チョコは好きなんだけど、少しオーバーに喜ぶのが大事なのだ。ただし女性限定である。男性に対して同じ態度を取ると、逆に女性の反感を買ってしまう。相手に応じて喜び方を変える必要があるなんて、つくづく人付き合いは難しい。

「羽坂さん、今回のスノボは行くんですか？」

「まだ考え中なんですよ。水沢さんは行くんですか？」

「うん。思い切ってボードも買おうかなって。今度の休み、笹塚さんに見てもらおうんですよ」

……なぜそこで笹塚の名前が出る？　いや、別に関係ないけど。

それにしても、スノーボードか。高いんだろうなあ。冬はクリスマス商戦に向けてたくさん新作ゲームが出る時期だから、私には他のものを買う余裕なんて一切ない。

もちろん、そんな話をするわけにもいかないので、私は適当に話を合わせておく。

「ボードって、やっぱり買ったほうがいいんですか？」

「続けるつもりなら、買ったほうがいいですよ。レンタル品はあまりいいものがないですからね。でも、一シーズンに一、二回しか行かないならレンタルでもいいかも」

「そうなんですか。じゃあ私はレンタルで充分ですね」

そもそもゲレンデに行ったところで、滑れる気がしない。正直にそう言うと、水沢さんは口元に手を当ててクスクスと笑う。

……私は『なんちゃってお嬢様』だけど、水沢さんは『リアルお嬢様』という感じだ。育ちがよさそうで、とても可愛らしい。ふわふわした髪型もいいなあ。私は剛毛なので、ああいうナチュラルパーマはかけられない。羨ましい限りだ。

その後、再び仕事に取り組んでいると、程なくして一時になった。私は事務所に戻ってきた横山主任に挨拶し、水沢さんにも頭を下げてから休憩フロアへ向かう。

弁当を手に休憩フロアへ入れば、いつもよりざわざわしていた。そういえば今日、別の支社の人たちが来てるんだっけ。朝礼で言ってたよね。

空いてる席を探していた時、ふと、カツ丼を頬張る笹塚が目に入ってしまった。

……どうしよう。

いや、なぜ悩むんだ、私。関係ないだろう。会社では他人だ。奴とは、ただ一緒にゲームをやっているだけの間柄なんだから。

笹塚から離れたところに空いてる席を見つけて座り、弁当を開ける。それでもぐもぐと惣菜を食べていると、目の前に影ができた。顔を上げれば、カツ丼とビニール袋を手にした笹塚の姿がある。

「なんでそんな隅っこで食うんだよ」

「……いや、ここが空いてたから」

「俺の向かいだつて、空いてるだろ。来ればいいじゃん」

「……や、その……まあ、そうなんだけど……」

なぜどもるんだ、私。そしてなぜ私の向かいに座るのだ、笹塚よ。

奴はガツガツとカツ丼の残りを食べ、脇に置いたビニール袋からコンビニおにぎり三つとインスタント味噌汁、菓子パン二つを取り出した。……それ全部を食べるつもりか。笹塚はインスタント味噌汁のフタを開けると、「ん」と言つて私に差し出した。

「何？」

「お湯入れてきて。どうせお前、お茶汲んでくるんだろ？」

「……お茶は淹れてくるつもりだったけど、キサマはお願いしますの一言も言えんのか」

「お願いします」

即答か！ まあいいけど。なんか悔しいのはなぜだ！

仕方がないと給湯室へ向かい、二人分のお茶を用意する。それから味噌汁に湯を注ぎ、盆に載せて休憩フロアに戻った。

「お湯、入れてきたよ」

「ありがとう。あ、俺のお茶まで淹れてくれたのか。気が利くな」

「……いや、これは私が飲むんだ。お茶を二杯飲むつもりだったんだ」

「なんだそれ？ もらうぞ」

「クツ、なんか笹塚さんにお茶を渡すのが腹立たい！ 淹れなきゃよかった！」

意味がわからんと笹塚はツッコみ、コンビニおにぎりのフィルムを剥がして食べはじめた。

私も自分の弁当に箸を伸ばす。すると笹塚は、物珍しそうに眺めてきた。

「羽坂さ、料理はできるのか？」

「できないよ。これは、近所の惣菜屋で買ったおかずをお弁当箱に詰めたもの」

「……それも、あれか？ お嬢様面のためか？」

「うん。手作り弁当はポイントが高いからね、女子力が高いと思われる」

「お前なー。絶対、詐欺だからな？ それは手作り弁当って言わねえ」

「惣菜と言つてもお店の手作りだし、厳密に言えばこれだつて手作り弁当でしょ」

「それを詭弁と言うんだよ」

笹塚は呆れたように言つて、コンビニおにぎりをパクパクと食べる。すごい、三口でおにぎり食べたよ。口が大きいというか、食べ方が潔いというか……

私も笹塚も、黙つて食事を続ける。しばらくして、また笹塚のほうから話しかけてきた。



「ホントに何も作れねえの？ 料理」

「うん」

「まじで？ 何一つ？」

「しつこいな。……おにぎりくらいなら作れるけど」

「ああ、おにぎりね。羽坂の家が米農家だからか？」

「それは関係ないと思うけど。でも田植えや稲刈りは手伝いに行くから、その時におにぎりをいっぱい作ってる」

繁忙期は、家族総出で働くのが我が家のしきたりだ。両親や姉夫婦はもちろん、じいちゃん、ばあちゃん、おじさん、おばさんも手伝う。だから昼食に、大量のおにぎりとおかずを作るのだ。おかずは母さんと姉ちゃんが作るけど、おにぎりは私が作る。

笹塚は「なるほどな」と相槌を打って、味噌汁に口をつけた。……もうおにぎりを三つ食べたらしい。私はまだお弁当の半分が残っているというのに。

しかし、こうして笹塚と話していると、さすがに周りが気になってくる。素の口調がバレそうでヒヤヒヤだ。

「笹塚さん。会社ではあまり私に話しかけないでくれないかな？ 仕事の話は除くけど」

「なんでだよ。昼飯食ってる時くらいはいいだろ」

「笹塚さんがよくても、私はよくない。私たちの会話が聞こえて、お嬢様が実は根暗ゲーマーだってバレたらどうしてくれるんだ」

すると笹塚は「はあ？」と呆れたような顔をした。そして何か考えこむような表情を浮かべ、菓子パンの袋をびりびり開けながらぼそりと呟いた。

「……お前は別に根暗じゃねえよ。ゲーマーなことは否定しねえけど」

「へ？」

何を言っているんだ。私が根暗じゃない？ どこが？

首を傾げていると、笹塚は言葉が続けた。

「根暗っていうのはな、文字通り根が暗いってことだ。だが、お前は別に暗い性格でもなければネガティブでもないだろ。だからもう、自分のことを根暗って言うな」

「……夜ごとパソコンやテレビに向かって黙々とゲームしてる私は、充分暗いと思うんだけど」

「それなら俺だってそうだろ。夜はいつも、お前とゲームしてるじゃん」

「そ、それはそうだけど。休みの日だって、一日中ゲームしてるもん。あと、面白いことがあったら『グフフ』って笑っちゃうし。パソコンの前で一人グフグフ笑うのは、我ながら絶対暗いと思う」

「……それはお前が変なだけであって、暗いわけじゃない。俺だって、一人でテレビ見

て笑ってるよ。それは暗いのか？」

変なだけって、失礼だな。……否定できないけど。

それはさておき、テレビを見て笑うことは、確かに暗いわけじゃないと思う。ということは一

「私は……根暗じゃなかったのか」

「ああ。おかしな奴ではあるけどな」

「……それは褒め言葉じゃないよね？ 怒っていいとこだよね？」

「真実だろ。だから怒る必要はない。褒め言葉じゃないことは確かだけどな」

笹塚は私を見てニツと笑う。

……なぜか顔がカアツと熱くなった。なんで？ え、まさかこれ、私、照れちゃってるの？

どうしよう、すごく居たたまれない。話題を変えるべきだ。何を話そう……ってああ、思いつくのはゲームの話題しかない！

「あれだ！ えっと、そう、レベル15！」

「は？」

「レ、レベル15になったら、馬に乗れるクエストができるの。そ、それで、そのクエストはちよっと時間かかるから、今度の休みにでもやらない!？」

## 立ち読みサンプル はここまで

「今度の休み？ あー、土曜ならいいけど日曜は……」

言葉を濁す笹塚。そこでハタと思いつく。そういえばさつき、水沢さんが笹塚と出かけると言っていた。

「私、今週の休みはずっと家にいるつもりだし、土曜日でいいよ。日曜日は水沢さんと二人でボードを見に行くんでしょ？」

「……なんで知ってるんだ？ って、水沢が言ったのか」

「うん。今年もスノボに行くから、ボードを買おうかなって」

するとなぜか笹塚は黙ってしまった、バクバクと菓子パンを食べた。すごい、あれだけ大きくて細長いパンを三口で食べた。口の中、パサパサにならないのかな？

笹塚はゆっくりお茶を飲むと、湯呑みをテーブルに置く。

「……二人じゃねえよ」

「ん？」

「だから、水沢と二人で行くわけじゃねえよ。皆でボードを見に行くんだ。他にも園部とか総務の高嶋とか……高嶋目当てに事務の子とか、色々来る」

「そうなんだ」

「そうだよ」

結局、笹塚は何が言いたいらろう？